せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第137号・平成13年2月1日

年表で読む古平の歴史《44》

ナマコ漁

古平場所を開いた岡田家の分家に当たる岡田小八郎は、正徳三年（一七一三）に松前に渡って来ましたが、商用で松前と長崎の間を往復し、煎海鼠（いりこ）・干鮑（ほしあわび）・鱶鰭（ふかひれ）などが長崎俵物（たわらもの）として、支那（現在の中国）への重要な輸出品であることを知り、やがて仲間とこれらの品物を取り扱うようになりました。

煎海鼠は徳川幕府への献上品でもありましたが、貿易品の中でも貴重品として取り扱われていました。

これより前に、幕府の内命によって松前藩が煎海鼠を長崎に移出していましたが、その後、岡田家などの近江商人にこれらを任せるようになりました。

ナマコは、松前から宗谷辺りまでの日本海沿岸に最も多く生息していて、長崎俵物（ひょうもつ）役所の等級判定でも、当時の蝦夷地と三陸海岸のものが品質良好と評判でした。生産量も、

一七四四年　一二八、五〇〇キロ
一七四五年　一八、九六〇キロ

と記録にあります。

当時、古平でもナマコ引きの漁をしていましたが、詳しいことは分かっていません。ナマコ漁も幕府が「海鼠引稼方場所」として、それぞれの場所での漁をする人数を決めていました。

一、スッツ・ヲタスツ・イソヤ・シヤコタン・ヒクニ・フルヒラ・アツタ

〆（しめて）八カ場所は一場所二人ずつ、この人数をこえた時は役銭（税）を取り立てる。

などという文書は見ることができます。

ナマコはさらに昔は単にコと言い、それを煎（い）って干したものを海参（いりこ）と言っていました。干しナマコは、内臓を取り除いたものを薄い塩水で煮てから干すが、色合いを良くするために、干し上がる前にヨモギの煮汁で再度煮ることもあったといいます。明治の末ごろの生産量は四万貫（約百五十トン）にも達していました。

古平でも、戦前はごく小規模に煎海鼠が生産されていましたが、その生産額などは分かりません。

アワビ漁

アワビも煎海鼠や鱶鰭（ふかひれ）などと共に、長崎俵物として重要な生産物でした。

アイヌの人たちはアワビ・ナマコ・タコなどを獲るとき、波が立って底が見えないようだと魚油を流し、波を静めて漁をしていた、という言い伝えがあります。

これについて、そのころ蝦夷地を調査していて入舮付近に来た人が、海岸に沢山のフグの骨が捨てられているのを見て漁師に尋ねたところ、フグの油を海に流すと波が静まるので、それを漁のときに使うのだ、と言っていたという記録があります。

アワビは干しアワビにしますが、これには黒干しと白干しの二通りがありました。

黒干しというのは、蝦夷地のほか南部・津軽・坂田・秋田周辺でも生産していて、貝からはずしたアワビを串に刺し、それを囲炉裏（いろり）の上に掛けてくん製にしたものです。白干しというのは、串に刺したものを天日に当てて干したものをいいます。

また、漁の時期については、主に六、七月ごろだが、都合良ければわずかだが冬でも漁をする、と書かれた文書が残っています。

大正七年

9／25　昨夜からの風、大暴風となり柾や瓦が飛び、学校では先生が付き添って集団で下校した、分吉田、㊢㊥本ではえびす倉の屋根をはがされ、新地方面でも多くのところで屋根を壊された、家のサクランボも三、四本を残し、全部風で倒されてしまった、午後からは雨もまじり荒れ狂った、十数年来こんな大風はない。

9／26　昨日の風でリンゴが全部落ちた、大不作だ、火事でもあったら町は全滅だ。

9／27　新聞によれば、先日のような風は数十年来とのことであった。

10／9　リンゴは不作で、その上この間の大風でみんな落ちてしまった、イモ掘りをしたが、一俵一円六十銭で六十俵売った。

10／13　七時、陸行で余市まで行く、沖村までの道路を百数十人で直している、ずいぶん堅固なものだ、天気も良く、山道をブラブラ歩く、湯内で掛取りをし、十一時ごろ出足平（現在の白岩町）に着いた、余市に十二時半に着く。

10／15　豊丸に乗ったが、入舸からカムチャッカへ出稼ぎに行き、帰りの二十数人といっしょになる、先月二十五日の暴風では命拾いをしたという。

10／18　大謀網でサバが大漁、町売りが十銭で五十五匹。

10／19　西の宮神社（恵比須神社）の祭礼、大根は種子がいて焼き干しを作ったが、十銭で六十匹ぐらいになり安いものだ、寒くなり、店にもコタツをいれた。

10／24　初雪が降り四、五寸も積もった、初雪にしては珍しい大雪だ。

10／29　大謀網が大々漁、寿都組三万円、十二（マ）組合一万五千円の水揚げがあったそうだ。

10／30　出足平から川崎船は竣工するとのこと、これからは実に便利になる。

11／5　このごろ感冒が大流行している、小学校でも三百六十人からの欠席があって、向こう五日間の臨時休業にするとのこと。

11／6　風は冷たく海は時化、沖には五、六百トンの汽船五隻が避難している。

11／20　新聞では世界的にカゼが大流行していて、日本ではこのカゼにかからない所は無いという、家でも富山の売薬は飲み尽くした、古平でも死亡する人が多い。

11／22　大謀網は大々漁が続いていて、大謀始まって以来とのこと、鮭、サバが掛かっている、カゼの流行で毎日のように葬式がある。

12／2　タラ漁があり一束十円、カゼは少し下火になったようだ。

12／10　今日も時化でタラ、カレ網は出られないが、タラ、カレの値段は珍しい高値だ。

（以下　次号）

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を眺める

【38】

悪くて不作だったが、タイ菜は珍しいほどの豊作だ。

10／20　衛生検査があるので家の掃除や秋始末をする、湯内から客が来た、余市辺りでは原価の二割掛けらしいが、家では一割ぐらいで奮発しよう、薄利でも売る方が勝ちだ。

10／23　父がサバ一樽一円四十銭で買って来た、家中で焼で、五人がカレ網を買いに来たが現金だった、薄利多売が何より商売の秘訣だ、小樽よりも安くしている。

10／31　天長節（昔の天皇誕生日）で、各戸で国旗を出している、ビヤホールでは二階の大普請をしている。

11／3　沖村の道路工事は予想以上にはかどり、十一月に

つれづれに思うこと

福井幸平

いつか古平から馬が消えた、と書いたが、今度はペットとして犬・猫が目につくようになった。ブームとは言わないが、手入れの行き届いた犬を抱いて歩く人、運動に散歩にあちこちで見受けられる。雑種あり、高価な血統書付きもあり、世の中平和だと思う。人を愛する、動物を愛することは良いことだと思う。テレビニュースで聞く青少者の殺人、放火、いじめなど心のいたむばかりである。七転び八起き、どうにか今日まで生かされたことを感謝している。やはり八十過ぎまで生きると、人の弱さ、人生の苦楽、あたたかさ、反目、闘争、懐かしい。

いつか、自分史らしきものを書こうと思うが、気力、体力がなく、日記のつもりで晩学の俳句のまね事をしている。

七十五歳を過ぎてからは入退院の繰り返しで、病院の天井を見て暮らすようになったが、本を読む時間が長くなり、毎日の新聞も詳しく読むくせがついた。素人ながら川柳、俳句の身近な友達もできて、患者同士で余暇を楽しめた。『せたかむい』を病院で見る感動も大変なものだった。

× ×

まだ赤い食いのこされしななかまど

おにぎり

竹内コト

町を歩いていてどこの食料品店へ入って見ても、棚にはいっぱいの食品があふれるほど並んでいて、おにぎりひとつを見てもいろいろな種類のものが売られています。食品の豊富なことは驚くほどです。

私が子どものころ、父は毎朝早くから沖へ漁に出かけます。漁の合い間には山へと、一日たりともただ家にいるということはなかったようです。母も暗いうちから起きて、父の弁当づくりです。

父の弁当は大きなおにぎりでした。おひつのふたを裏返してぬれたふきんを敷き、そこにご飯を盛り上げるようにのせ、中に梅干しを入れてふきんの四隅を持ち、ふきんを絞るようにして、ふたの中でぐるぐる回しながらご飯を固く握っていくのです。その大きなおぎりに塩をふってから、網わたしの上で少し焼き上げるのですが、この焼きかげんもまた大事で、上手にこんがりときつね色になるのです。おにぎりの匂いがたまらなくいい香りがしてきます。おにぎりに海苔を使うことなど、ぜいたくだと思われた時代です。

私たちがどこかへ行くときなどよく母に作ってもらい、素朴で質素なものでしたが、おいしく食べた記憶があります。時には、ゴマ塩のおにぎりも作ってもらいましたが、ゴマの香ばしさと、焼き目のついたおにぎりはとてもおいしく、食欲を大いにそそるものでした。今も「食べてみたいなぁ」と、思うことがあります。

また鰊場では、きな粉やとろろ昆布をまぶしたおにぎりが出たことがありましたが、あの忙しい鰊どきにわざわざ手をかけて作るのですから、何か良いことでもあった時なのかも知れません。

母はよく「山子（やまご）の五合飯（ごごうめし）」と言っていました。山へ働きに行く人は、特に大きなおにぎりを持って行ったそうで、父が山へ行くときも、なんかいつもより大きなおにぎりを背負って行ったように思います。

毎日が粗末な食事でしたが、それでいて父は健康で、八十歳をこえるまで元気な一生を過ごしました。

―古平いろはうた―

ろ　六三制戦後生まれで難産し

終戦から二年後の昭和二十二年三月、戦後の大きな改革の一つである学校関係の法律が改正され、六・三・三・四制の新学制となり、六・三制の義務教育が実施されることになりました。

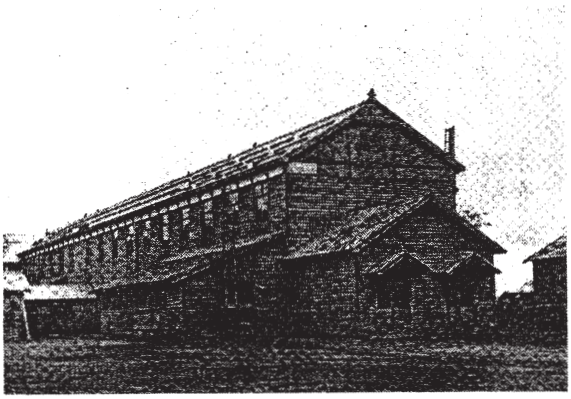
だが、これほどの改革にウラ話があって、新任の文部大臣が占領軍の担当局長にあいさつに行ったところ、待ち構えていたその局長が何か早口でまくしたてた。大臣はよく分からなかったが、「イエス、サンキュー」と答え、握手をして帰った。後で通訳から話の内容を聞き、大臣の顔色が変わったという。

「六・三制の実施は大丈夫でしょうね」と言う質問に、「イエス、サンキュー」と答えていたというのです。

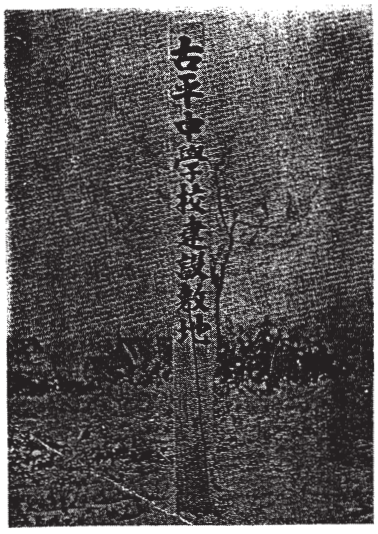
歴史の変わり目には、とかくこんなことがあるようです。

さて、いよいよ実施となってみると設備は荒廃し、物資の欠乏していた戦後のこと、特に義務教育となった新制中学校の施設の不足は、どこの市町村にとっても深刻な問題でした。

古平中学校は五月一日、学校長以下教職員八名が発令され、一年生は義務教育として全員が入学、二、三年生は自由入学ということで、生徒数四百二十七名でスタートしましたが、初代校長が着任しなかったため開校式は行われませんでした。



〈古平小学校校舎に間借り〉



〈旧校舎建設敷地の標柱〉

教室は小学校に間借りし、机やいすなどが人数分が無く、長いすに詰めて座ったり、一人用の机を向かい合って二人で使ったりしました。

十月になり、初代校長が着任しないまま二代目校長が発令になり、翌昭和二十三年一月五日開校式が行われました。当日はお祝いとして生徒には紅白の餅が渡され、一般来賓らには祝宴が設けられ、午後からは父母を映画館に招待して式典を祝ったのでした。

は　泊月の句碑を照らして盆の月

ホトトギス派の中でも、熟練の俳人として名を知られていた野村泊月が、昭和五年六月、古平に来遊したときの句です。

当時、古平にも句会があって俳句が盛んでしたが、このときに、泊月の指導を受けたのを機に古平町内にも俳句の愛好者が一気に増え、新聞の俳句欄などにも競って投稿するほどの熱の入れようで、その活動ぶりが注目されるようになりました。

古平は、松前藩の古平場所として漁場が開かれて約四百年が経ち、かつては鰊漁場として繁

⇦（次ページ3段目へ続く）

なんとか考えよう

室谷忠雄

「…去年の十二月末に、市街地から遠く離れ、十軒余りが住んでいるこの地域にもようやく水道がつきました。私たちの町に水道がついてから実に四十年ぶりのことです。今までずうっと沢からの水や川水を利用していましたが、毎日の水汲みの苦労は大変なものでした。蛇口をひねると勢いよく出て来る水道に感激しました。便利な水道に感謝しています。」

これは先月の道新『読者の声』に載っていた記事の要点ですが、生活する上での水の大切さと有り難みがわかります。

私たちは水道の蛇口をひねると、いつでもきれいな水が出ることを当たり前のこととして生活しています。

水は水道の蛇口ばかりではなく、海にも川にも湖にもみられるし空からも降って来る。それで水は空気のようにありふれたものと思っているようです。しかし、水は無限にあるように見えますが、決してそうではありません。

水がこの地球に出現して約四十億年、この水から発生した最初の生物から、現在のような多種多様な生物が生まれてきたと考えられています。

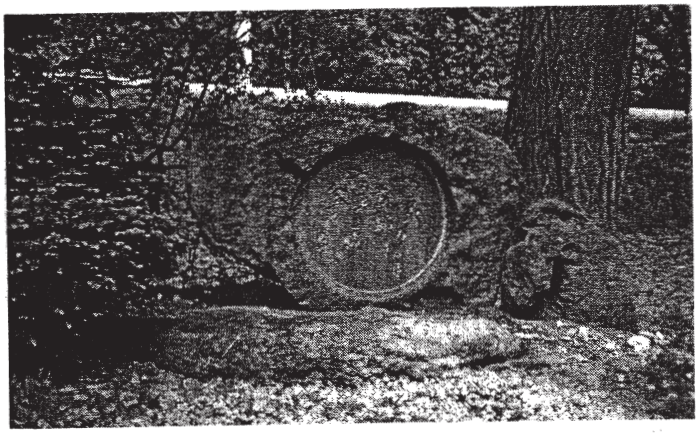
人間が最初に信じた神というは水であったといわれていますが、地球の表面の約70％は海で、その中の97％が海水、2％が氷で、残りの1％が河川・湖・地下水などの淡水だといわれています。この僅か1％の水が、地球上の生き物の生命を支えているわけです。

すべての生命の源である水を大切にし、有効に使うことがこれからの私たちの責任だと考えています。

（前ページ下段から続く）

栄してきた漁業の町です。お盆のころに見る満月は祖先の供養への思いが色濃く、古平を離れて墓参に訪れる人たちも格別の感慨をもって眺める月でもありましょう。

泊月はホトトギス派の伝統を忠実に実践した一人で、その用語は平易で明るく、のどかな境地の中に余韻があり、すべての句に一貫した調子があると評されています。



〈禅源寺境内の泊月の句碑〉

また、若いころにアメリカに留学し、帰国後は英語の私塾を開いて英語教育にも力を注いだという経歴があります。

この句碑は、泊月が主宰する『桐の葉』十五周年記念と、泊月の古稀を祝い、古平の俳句の興隆をもたらしてくれた感謝の気持ちをこめて水見悠々子が建て、文字は泊月の直筆で、最初の句碑でもあります。

除幕式には、悠々子から俳句の指導を受けていた古平小学校六年生の児童も参列し、記念撮影におさまっています。

晩年になって眼疾で失明し、七十九歳で死去しました。

【参考】いろはがるた

京都＝論語読みの論語知らず

大阪＝六十の三つ子

東京＝論より証拠

京都＝針の穴から天井覗く

大阪＝花より団子

東京＝花より団子

断章小説【ふるさと遥か】第19編

南十字星

吉川義雄

美しい星であった。なぜこんなときに、あの星を仰がねばならないのか…。

またも二人の部下を失ってしまった山崎は、飛行場のはずれで燃え盛る火葬の炎を背に、止めようもない涙の中で嗚咽(おえつ)していた。

昨夜、薄暮を利用していつの間に忍び寄ったのか、双胴の長距離戦闘機P38が超低空で、この基地を襲って来た。25ミリ機関砲を装備している敵機は、たった三機で暴れまくり、基地に惨憺たる被害を与えて飛び去って行った。

大口径の銃弾の威力はすさまじく、兵員は壁を通して打ち抜かれ、内臓を散乱させて死に追いやられた。首の所在さえ分からない下士官の遺体もあった。

十数人の戦死者は一か所に積まれ、廃材が上を覆って油が注がれた。

夜明け頃まで炎は天空高く舞い上り、そして燃え続けた。そこには葬送のラッパも鳴らず、弔砲の響きもない。南十字星だけが哀しげに瞬いていた。

山崎の遥かなふるさと。北国の澄んだ空には北斗七星が並び、その星座を仰いで彼は、若い生命(いのち)のこれからを望み、燃える想いを星に告げたこともあった。恋もしたいし、愛を告げたいひともいた。

…君死に給うことなかれ…与謝野晶子の峻烈な歌詞に出会って、涙でこぶしをあげた日もあった。

出征以来、「何故」に答を与えられる日はついに来なかった。国という巨大な機構の中で、一個の人格は虫ケラみたいに押しつぶされ、押し流され続けた。国とは、人民を幸福にするために存在するもの。当たり前のことが当たり前になるまでには、どれ程の血が流され、苦渋の呻吟(うめき)が他国にも、列島にも覆い続けたことか。

戦闘を重ねて、やっとこの島に辿り着いたとき、山崎は、基地の上空で美しい星を見た。あれが南十字星だと教えられなくとも、それとすぐ分かった。

その星は美しい瞬きをしながら、よく山崎に語りかけてきた。

「生きて帰りなさい。北斗の星さんも、心配して見ているよ」

「必ず生きて帰ります。どうかお守り下さい」と、彼も誓いと祈りだけは念じていた。

生き残るということは、どうしてこんなに悲しいものなのか。生きる意味も、死の意味も分からない空虚はまだまだ続くだろう。戦場での感傷は、それに浸っていられる程のどかでない。

火葬の炎は、明け方まで燃え盛っていた。

死者の故郷では、身内も恋人も友人も、誰ひとり愛するその人が、南十字星の哀しげな瞬きに見守られながら、煙となって昇天していることを知らないだろう。悲しいことだ。

翌日、兵たちの大騒ぎが隊内の一隅で沸き上がった。昨夜投下された小型爆弾の穴に、破裂した水道管の水たまりができ、水さえあればすぐ飛び込む習性のある水牛が入ったらしい。蟻地獄のような穴は、一見浅く見えても水牛の足は底に届かず、引き上げようにも掛かり手が無く、みすみす沈めてしまい、ついに駄目でしたと、部下の一人が悲しげな顔をして山崎に報告した。

またひとり部下を失った気分で、山崎は天を仰いだ。戦争の残酷さは人にも動物にも、そして美しい山河にも、限りない地獄の苦痛を与え続けて止まることを知らない。今宵、星の慈光を待つまでの時間は永かった。

（この稿終わり）

遥かなる故郷の思い出

わが闘病日記

橘　義春

癌（ガン）　―続き―

7月31日（木）

いよいよ大腸の手術をする日が来た。今日も体調は良いようだ。体重は70キロはあり、おなかは相変わらずポンポコたぬきの太鼓腹で、脂肪が多いので手術をなさる先生方にはお気の毒だ。

だがひとつ気になるのは、腰の脊髄にうたれる麻酔の注射である。それは馬にでもやるような太いヤツで、五十代のはじめに盲腸をやったとき、あまりの痛さに思わず腰を引いたらあの太い注射針がスポンとしまい、またやり直しで二度も痛い目にあっているので、今度もそんなことがないように神様仏様だ。

午前八時ころ、家内と長女が手術の立ち会いに来た。九時、寝台車に乗り、家内と長女に「がんばって…」と、励まされて手術室に入る。

手術室には執刀医の跡見教授と主治医の桂、植木の両先生、麻酔担当の先生、看護婦、スタッフの先生方が大勢待っておられた。

いよいよ正念場だ。麻酔担当の先生から「麻酔を始めます」と言われたときは、また、あの馬にやるような太い注射をズブリとやられるものと観念していたら、なんと二十年前とは違っていて、あの太い注射をする箇所の周りを細い注射器で何か所か麻酔をし、その後に太い注射器でズブリとやるやり方で、今回は何も痛くなく、「エガッタ、エガッタ」とニンマリ、とんだ取り越し苦労であった。

後は麻酔用のガスマスクを顔につけたら、いつの間にやら意識がなくなってしまっていた。

深い眠りから覚めたら、そこは観察室であった。

「あっ、大腸の手術は終わったのだ。」

頭が何かボーとしている。おなかの方は全然痛くない。まだ麻酔が効いているようだ。

三時間の予定の手術が六時間もかかってしまったため、家内も長女も大分心配したらしい。

夕方、主治医の桂先生が廻って来られて、

「橘さん、気分はどうですか」

「ありがとうございました」

大腸を二十センチ切除するところを、三十センチ切除したそうだ。傷口を拝見と言って、包帯をとり縫った箇所を見ているので、私も頭をもたげて見た。あの太鼓腹のへその下を真一文字に切っている。傷口の長さは三十五センチはある。

へその両脇辺りのところへ、人差し指が入るぐらいの孔が二か所あり、そこへゴムの管が二本入っている。また、左腕には点滴のチューブが十本程もぶら下がっていて、まるでスパゲッティが垂れ下がっているようで、身動きもできない状態である。

さて、手術は何とか終わったが、ガンの進行度や他臓器への転移などは、これからの臓器の組織の検査を待たなくてはならない。

―続く―

あとがき

☺新年早々から寒波に襲われ、日本列島がすっぽり冷凍庫のようでしたが、この後は平年並みということで、暦の上では間もなく立春です。「春は名のみ」ということでしょうか。

☺不振挽回と、一月号の『せたかむい』を十二ページに増ページし、付録？　ではありませんが「いろはうた余話」も出したところ、六百五十部を捌きました。『余話』の方は印刷が少なかったので、注文があるのですが今のところ増刷はしません。

☺来月号はまた特集を組みますので、ぜひご愛読ください。

節分

幸せを願い邪気を払う
昔は宮中の行事

季節の変化がはっきりしている日本では、暦にも季節に関係した民俗行事のようなものが載っています。これらは日本人の永い生活の体験から生まれたもので、その多くが生活にとけ込んで年中行事となっています。

北国ではまだまだ雪深いこの時期も、暦の上では四日が〈立春〉で前日が〈節分〉です。もともと立春・立夏・立秋・立冬の前日がすべて節分でしたが、旧暦では立春が一年の始めとされ、気候も冬から春になるということで、この節分の日が一年の終わりと考えられていました。

この日、豆まきをして鬼を追い出す風習は中国から伝わって来たもので、昔は鬼遣（おにやらい）などと言われ宮中行事の一つでした。それが次第に民間にも伝わって、毎年、大晦日（おおみそか）になると鬼を払う行事になり、年男といわれる人が「鬼は外、福は内」と言って、煎った大豆をまく厄払い行事は、中国・明（みん）の時代の風習でしたが、今から六百年ほど前に日本に伝わって来たといわれています。

豆まきをした後、自分の歳の数だけ豆を食べるという習慣は、これが年取りの行事であったという名残りです。

またこの日の夜には、家の入口にイワシの頭を刺した柊（ヒイラギ）の葉を差しておくという習慣がありますが、こうしておくと鬼が柊の葉に刺さって痛がり、イワシの悪臭にびっくりして逃げて行くというわけです。邪気が家の中に入らないことを祈る風習でした。

古平では煎った大豆を桝（ます）に入れ、煮干しをのせて、神棚に供えてから豆をまくようでした。漁家や商店など、縁起をかつぐ商売をしている家では大切な年中行事の一つでした。

俳句

古平ホトトギス会

句碑を訪ひ涅槃寺へと歩をのばし　斉藤波留
幼なき子湯ざめ何処から来しと問う　山口悦子
四日早や子らの帰りし独居かな　越野敏雄
古平にいろは歌出来冬ぬくし　大和田絵伊
対岸の雪山晴るゝ出船かな　福井幸平
ななかまどこんもり雪を乗せており　関口勝志
寒鰤の釜煮こってり母の味　よしざき　り
ゲームする従兄弟再従姉妹のお正月　仲谷比呂古
初秋の海原もまたそれらしく　越野清治
丸山の岬を染める初日の出　室谷弘子

川柳

新年も家庭平和に子と孫に　石井愛子
賀状にて孫の写真が微笑んで
老いになり色いろな方と寄り添うて

【訂正】野村泊月・[illegible]泊月の句碑を照らして盆の月の後に、次の句を挿入します。
〈蝦夷の古都　古平濱の盆の月〉